

昨年十二月、東京・銀座のニコソロンでフランスの女優エマニュエル・リヴアの写真展を見た。一九五八年に映画「ヒロシマ・モナムール」(邦題「二十四時間の情事」)のロケで訪れた広島を、持参したカメラで撮影したものである。この写真展で何より感動的だったのは、子どもたちの表情。大人に対する屈託のない信頼の証しがある。復興への力を感ぜさせる映像であった。

私の目をひいたもう一枚の写真があった。それは五年に完成し、八六年に閉館した平和記念公園内の広島市公会堂である。かつて世界の演奏家たちがここを訪れ、私をはじめ広島音楽ファンを魅了した。

そんな演奏家の中で私の

経営コンサルタント

岡村有人



おかむら・くにと 1947年広島市生まれ。2003年音響機器メーカー・ボーズの副社長を退職後、独立。東京都世田谷区。

今を読む

繁栄の先に何を見たか

リヒテルに思う

を映す鏡であり、その時代に問う場面がある。の歴史観と人々の生きざまを如実に伝える。東欧の作曲家の音楽には、人間存在への純粋な叫びとつぶやきのようなものがあった。

後に映像作家モンサンジョンが手がけたドキュメンタリーは、リヒテルの芸術家としての人となりを伝える貴重な記録である。その中にリヒテルが圧倒的なアメリカデビューを果たして

長い沈黙の後、リヒテルしれる一方、その後直面する「繁栄と退廃」の矛盾を露呈し始めた時期でもあり、ソ連政府の監視を受けながら演奏活動する中、あえて亡命という選択肢を選ばなかったこの芸術家は、西側の繁栄のその先に何を見ていたのだろうか。

いずれの社会体制にも迎合することなく、またあえて反目することもなく、それは面白がなりの、権力からも権威からも物欲からも解放された孤高の演奏家。彼は九七年、最期までピアノが弾けなくなることを気にしながら八十二歳の生涯を終えた。世界経済が混迷を増す今、リヒテルが残したライブ・レコーディングの数々は、真の価値とは何であるか、という問いを問いつけてい

脳裏に最も鮮烈に刻まれたのは、七〇年に東西冷戦の「鉄のカーテン」を越えて西側に伝説の姿を現したピアノの巨匠スヴァトスラフ・リヒテルであった。前のオーラで満ちし、聴衆を

は美意識を異にし、潜在する自我意識とのかかわりを促す衝撃的な体験であった。

リヒテルはホールを奇跡的に満たし、聴衆を

半はシューベルトの「八短調遺作のソナタ」、後半はバルトークの「十五のハンガリー農民歌」などが続いた。後半の音楽は私にそれまでなじんでいたドイツ古典派やロマン派の音楽と

深い黙想のふちへと導いた。まさに音楽のメッセンジャーであった。この夜の圧倒的な感動が一体何であったのか、当時の私には十分に理解できていなかったかもしれない。芸術は歴史

問もないころ、ハンガリーから渡って名声を確立して育たない土壌という意味が読み取れる。

楽団指揮者(当時)、ユージン・オーマンディからアメリカに來ないかと誘いを受けるくだりがある。それをリヒテルは何やかやと理由をつけては断り、モンサリジョンが最晩年のリヒテル

かもしれない。芸術は歴史を映す鏡であり、その時代に問う場面がある。の歴史観と人々の生きざまを如実に伝える。東欧の作曲家の音楽には、人間存在への純粋な叫びとつぶやきのようなものがあった。

後に映像作家モンサンジョンが手がけたドキュメンタリーは、リヒテルの芸術家としての人となりを伝える貴重な記録である。その中にリヒテルが圧倒的なアメリカデビューを果たして

長い沈黙の後、リヒテルしれる一方、その後直面する「繁栄と退廃」の矛盾を露呈し始めた時期でもあり、ソ連政府の監視を受けながら演奏活動する中、あえて亡命という選択肢を選ばなかったこの芸術家は、西側の繁栄のその先に何を見ていたのだろうか。

いずれの社会体制にも迎合することなく、またあえて反目することもなく、それは面白がなりの、権力からも権威からも物欲からも解放された孤高の演奏家。彼は九七年、最期までピアノが弾けなくなることを気にしながら八十二歳の生涯を終えた。世界経済が混迷を増す今、リヒテルが残したライブ・レコーディングの数々は、真の価値とは何であるか、という問いを問いつけてい